

トマト養液栽培における糖度向上技術

表1 標準葉区および多葉区における1茎あたりの着生葉数の管理方法(2016)

標準葉区	11月28日～12月31日	1月1日～31日	2月1日～
	7枚	8枚	9枚から2週間ごとに1枚増やし最大14枚
多葉区	11月28日～		
	標準葉区より3枚多く管理		

表2 標準EC区および高EC区における給液ECの管理方法(2017)

標準EC区	定植～8月24日	8月25日～10月31日	11月1日～12月8日	12月9日～1月31日	2月1日～
	2.0dS/m	2.5dS/m	2.5dS/m→3.5dS/m へ徐々に上げる	3.5dS/m	2.5dS/m
高EC区	定植～8月24日	8月25日～10月27日	10月28日～		
	2.0dS/m	2.5dS/m→4.5dS/m へ徐々に上げる	標準EC区より2.0dS/m高く管理		

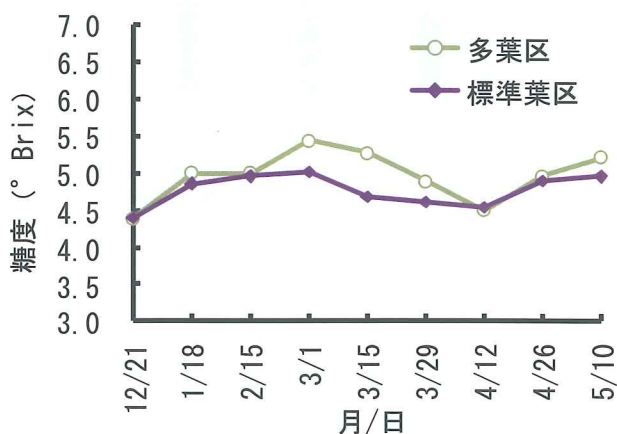


図1 葉数の違いが果実糖度に及ぼす影響(2016)

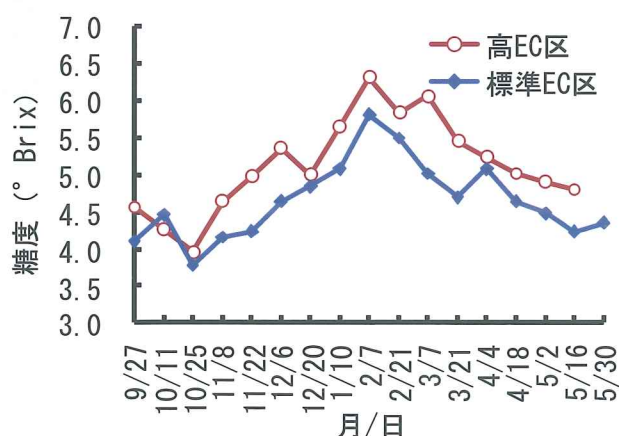


図2 給液ECの違いが果実糖度に及ぼす影響(2017)

国内の施設トマトの収量は年々向上していますが、多岐にわたる消費者ニーズに応えるためには、多収生産だけでなく、品質向上も重要です。そこで、当センターでは養液トマトのハイワイヤー誘引栽培における糖度向上技術の開発に取り組みました。

2016、2017年の2カ年度に大玉品種‘富丸ムーチョ’を用い、着生葉数と給液EC濃度について検討しました。2016年には多葉区として、表1のように11月28日以降の着生葉数を標準葉区よりも1茎当たり3

枚多く管理することで、果実糖度が向上する傾向がみられました(図1)。また、2017年においては、高EC区として給液ECを表2のように管理することで、糖度が向上しました(図2)。

なお、10a当たりの可販果収量は標準葉区の35.1tに対し、多葉区で33.1t、標準EC区の33.3tに対し、高EC区で31.6tとなり、いずれの技術においてもやや減少する傾向が認められました。

(先端生産システム第一担当 穂崎健昌
088-863-4918)